

はじめに

近年、こども家庭福祉をめぐる社会状況は、めまぐるしく変化している。少子化、こども虐待、こどもの貧困、いじめや不登校、ヤングケアラーなど、こどもと家庭をとりまく課題は、核家族化、地域関係の希薄化に伴う子育て家庭の孤立などもあいまって、より一層複雑化・深刻化している。そうした社会情勢の変化や実態に合わせて、法制度も変化し続けている。2023年のこども家庭庁の創設とこども基本法の制定は、その大きな変化の一つといえよう。こども基本法の制定による、こどもを主体にしたこどもの社会参加やこどもの意見表明権の保障に向けての動きは、こども家庭福祉の制度政策にとくに大きな影響を与えているといえる。20年以上前から指摘されてきた、こども主体やこどものウェルビーイングといった理念の具現化の可能性が高まったといえよう。

本書は、このような今起きているさまざまな変化を意識しながら、社会福祉士養成課程の初学者が、読みやすく学びやすいテキストをめざして作成された。社会福祉士養成課程で学修すべき内容を盛り込みつつ、ぜひとも学んでほしいトピックを50項目取り上げ、わかりやすく、また理解しやすいレイアウトで示したものである。項目は4頁で構成されており、読みやすさ、見やすさを大切にしつつ、かつ、用語解説もふんだんに掲載していることも特徴である。50項目を学ぶことで、こども家庭福祉の理念、考え方、歴史、法制度等の基礎を理解できるとともに、さらに学びたい人に向けても方向性を示している。

本書ではこれまで重要視されてきた、こども主体、こどものウェルビーイングなどのこども家庭福祉の根幹をなす理念を土台におきながら、こどもの権利やアドボカシー、自立支援などについて最新の考え方や法制度についてまとめている。全体は6章で構成されているが、1章から5章まではこども家庭福祉の全体像を理解してもらうために歴史的背景、法制度、考え方を中心に論を進め、6章は「こども・家庭福祉の支援の実際」と題して、各テーマにそって、少しでもリアルな現状を理解してもらえるような内容となるよう構成している。とくに女性への支援、ヤングケアラーへの支援、居場所支援、若者への支援、外国籍のこどもへの支援、LGBTQ+のこどもへの支援についての記載は、これまでのテキストにはない構成となっているといえよう。複雑なこども家庭福祉の全体像を理解するうえで、学習者のみなさまに本書が少しでも役に立つことを願っている。

最後になったが刊行にあたり、本書の刊行の機会を与えてくださった法律文化社様、にこん社・北坂恭子氏に深謝するとともに、関係者のみなさまに心より感謝申し上げます。

2025年9月

編著者